玄奘の唯識思想

――その推定方法と二、三の特徴について――

吉　村　　誠

序言

玄奘 (602-664) の唯識思想と言えるものを正確に指摘することは難しい。玄奘にはその思想を表明した著作がないからである。そのため、玄奘の思想は、主に以下の三種の文献を読解し、比較考量することで推定するという方法を取らざるを得ない。

1. 史伝 (『大唐西域記』、『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』、『開元釈教録』など)
2. 翻訳 (『瑜伽師地論』、『摂大乗論釈』、『仏地経論』、『成唯識論』など)
3. 註釈 (『瑜伽論記』、『解深密経疏』、『成唯識論掌中枢要』など)

史伝の研究では、『西域記』の記録や『慈恩伝』の上表文など、玄奘本人による文章が貴重な一次資料となる。しかし、玄奘の唯識思想が窺える資料となると極めて限られる。『開元録』の記録からは玄奘の翻訳の進行状況を知ることができる[(1)]。それによれば、玄奘は帰国直後の約五年間 (645-650) に唯識経論を集中的に翻訳しており、その中心は『瑜伽師地論』と『摂大乗論釈』の翻訳であったことが知られる。また『成唯識論』の訳出はその約十年後 (659) であり、翻訳には何か特別な事情があったことが窺える。

翻訳の研究では、玄奘が選択した 75 部 1335 巻の翻訳文献を分類することで、ある程度の思想傾向を指摘することができる[(2)]。玄奘の唯識思想を推定する有力な手がかりとなるのは、複数の著作を編集して翻訳された、合糅訳の『仏地経論』と『成唯識論』である。これらは玄奘の編著と言えるもので、前者で示された解釈が、後者で継承・修正・発展されている場合が少なくない。それら

の解釈は玄奘が重視した唯識思想である可能性が高い。また玄奘訳を梵本やチベット訳などと対照し、特徴を見出すことも重要である[3]。

註釈の研究では、玄奘の弟子たちの文献が豊富な資料を提供してくれる。道倫（遁倫）の『瑜伽論記』と円測の『解深密経疏』は、『成唯識論』以後の著作であるが、初期の唯識学派における議論が記録されている箇所があり重要である。また、玄奘以前の地論学派や摂論学派、玄奘以後の涅槃学派や華厳学派などの教義と比較して、唯識学派の教義の特徴を明らかにすることも可能である[4]。ただし、どの学派の著作であれ、そこで玄奘の説とされているものが本当にそうであるかどうかは、注意深く見極めなければならない。

これらの推定方法は、単独で行うこともあるが、複数を組み合わせて行うことが望ましい。そうすることで、相互に証明し合うことになり、推定結果の確実性が高まるからである。

小稿では、このような推定方法によって、玄奘の唯識思想と言えるものを指摘し、そこに見られる二、三の特徴について述べたいと思う。

一、五姓各別説

先ず、玄奘所伝の唯識思想の特徴の一つに五姓各別説がある。そのことは、玄奘の新訳に対して十四の疑義を呈した霊潤がその第一に「衆生界中立有一分無仏性衆生」[5]と述べていることや、玄奘の弟子たちの著作で五姓各別が前提とされていることからも窺える[6]。

ここでは、より直接的証拠として五姓各別の典拠である『仏地経論』の本文を取りあげ、これをチベット訳の戒賢『仏地経論』と比較してみたい。

> 盡虚空性窮未來際者、顯示世尊無盡究竟殊勝功徳。謂如虚空常無窮盡、諸佛法界所起功徳、亦復如是無窮盡故。如未來際無有盡期、利樂一切有情加行無休息故。
>
> 【問一】諸佛功徳、爲性是常無盡究竟、爲性無常相續不斷。
>
> 【答一】無盡究竟不可定説。以佛法身清淨法界理性功徳、性是常故、受用變化二身功徳、雖性無常無斷盡故、無盡究竟。
>
> 【問二】一切如來本發弘願、爲有情故求大菩提。若諸有情盡得滅度、爾時諸佛有爲功徳何不斷滅。

【答二】①諸有情界無有一切盡滅度時。故佛功徳無有斷滅。所以者何。由法爾故、無始時來、一切有情有五種性 *。一聲聞種性 *、二獨覺種性 *、三如來種性 *、四不定種性 *、五無有出世功徳種性 *。如餘經論廣説其相。

②分別建立。前四種性 *、雖無時限然有畢竟得滅度期。諸佛慈悲巧方便故。第五種性 *、無有出世功徳因故、畢竟無有得滅度期。諸佛但可爲彼方便示現神通、説離悪趣生善趣法。彼雖依教勤修善因、得生人趣乃至非想非非想處、必還退下墮諸悪趣。諸佛方便復爲現通、説法教化。彼復修善得生善趣、後還退墮受諸苦惱。諸佛方便復更拔濟。如是展轉窮未來際、不能令其畢竟滅度。

③雖餘經中宣説、一切有情之類皆有佛性皆當作佛、然就眞如法身佛性、或就少分一切有情、方便而説。爲令不定種性 * 有情、決定速趣無上正等菩提果故。由此道理、諸佛利樂有情功徳無有斷盡。

此利他徳依自利徳、乃得無斷。是故如來有爲功徳從因生故、雖念念滅而無斷盡。由佛功徳無盡究竟。是故成就最清淨覺。其餘諸句皆應如是一一配屬。(7)

これは『仏地経』で説かれる世尊の「二十一種殊勝功徳」の最後にある「尽虚空性窮未来際」に対する注釈である。玄奘訳の注釈は長文であるが、チベット訳の注釈は傍線部分のみである(8)。他の功徳に対する注釈と比較すると、チベット訳の注釈の方がバランスが良く、自然である。すなわち、玄奘訳の注釈は、チベット訳に相当する注釈に、二つの問答を加えて造られたものと推定される。

そのうち後者の問答では、①先ず「一切有情有五種性」として五姓各別が定義され、②次に「無有出世功徳種性」すなわち無性有情が永久に滅度しないことが強調され、③最後に「皆有仏性皆当作仏」が真如法身仏性についての説、あるいは不定種性を悟らせるための説であると説明されている。

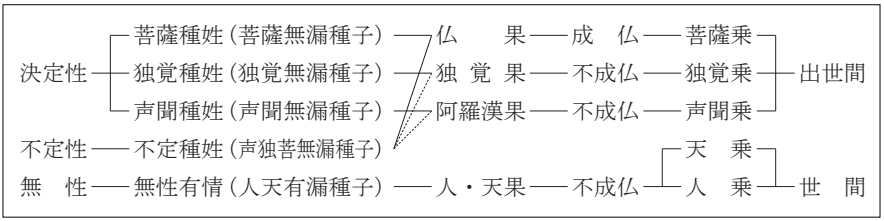
このことから、この『仏地経論』の本文は、チベット訳に相当する注釈を基礎として、そこに五姓各別に関する注釈を挿入して造られたことが窺える。それは玄奘があえて顕示したかった唯識思想と言ってよいであろう(9)。

同じ合糅訳である『成唯識論』も、護法の注釈を基礎として、そこに別の注釈を挿入して造られた可能性が考えられる。『成唯識論』では、阿頼耶識の種子について本有義・新熏義・合生義の三義が立てられ、護法の合生義が正義とさ

れているが、そこでは五姓各別であることの理由が次のように説明されている。

> 依障建立種姓別者、意顯無漏種子有無。謂若全無無漏種者、彼二障種永不可害、即立彼爲非涅槃法。若唯有二乘無漏種者、彼所知障種永不可害、一分立爲聲聞種姓、一分立爲獨覺種姓。若亦有佛無漏種者、彼二障種俱可永害、即立彼爲如來種姓。故由無漏種子有無、障有可斷不可斷義。(10)

すなわち、『瑜伽師地論』が障礙の有・無によって種姓差別を立てるのは、無漏種子の有・無を顕そうとしている。すなわち全く無漏種子がなく、二障（煩悩障・所知障）の種子を永久に断ずることができない者は、非涅槃法（無性有情）である。ただ二乘の無漏種子のみがあり、所知障の種子を永久に断ずることができない者は、一分が声聞種姓であり、一分が独覚種姓である。また仏の無漏種子があり、二障の種子をともに永久に断ずることができる者は、如来種姓（菩薩種姓）である。だから無漏種子の有・無によって、障礙に可断・不可断があるのである、という。これに唯識学派の解釈を加えて図示すれば、次のようになるだろう。

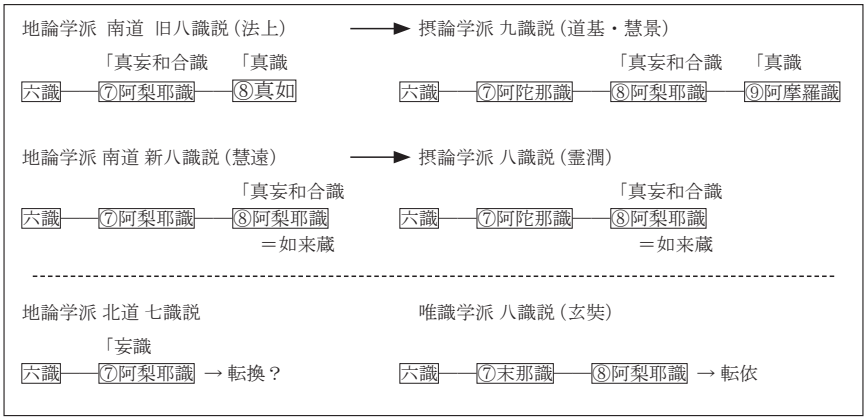


ここでは、無漏種子の種別や有無によって、『瑜伽師地論』の種姓差別説が再解釈されるとともに、『仏地経論』の五姓各別説の理論的説明がなされている。このことから、『成唯識論』の無漏種子説は、玄奘が翻訳の初期に提示した五姓各別説を、補強ないし確定する役割があったことが推定される。ここからも、玄奘がいかに五姓各別説を支持していたかが窺えるであろう。

二、八識説

次に、玄奘所伝の唯識思想の特徴として八識説の解釈を取りあげる。唯識思

想の心識説と言えば八識説が一般であるが、当時の中国ではそうではなかった。北魏・北斉の地論学派では七識説・八識説が唱えられ、隋・唐の摂論学派では八識説・九識説が唱えられていた。それを図示すれば、次のようである[11]。



地論学派には南道・北道があり、第七阿梨耶識（阿頼耶識の旧訳）を真妄和合識とする南道が主流であった。南道は阿梨耶識のほかに真識として第八真如を立てるなど、唯識思想を如来蔵思想で解釈する傾向が顕著であった。一方、第七阿梨耶識を妄識とする北道は、成仏以前に真識を立てることはなかったようである。しかし北道は、中国で如来蔵思想が流行し、南道が隆盛したために衰退した[12]。

摂論学派は、南道の心識説を継承し、第八阿梨耶識のほかに真識として第九阿摩羅識を立てる九識説を主張した。阿摩羅識は、摂論学派が依拠した真諦訳『摂大乗論釈』には見出せないが、同じ真諦訳の『決定蔵論』などに説かれている[13]。

これに対し、玄奘訳の唯識論書では第八阿頼耶識が説かれるのみであり、第九阿摩羅識は説かれることがない。阿摩羅識は無垢識という意味であるが、玄奘訳でそれに相当するものは浄識である。浄識は『仏地経論』において、次のように説明されている。

> 經曰。復次妙生、大圓鏡智者、如依圓鏡衆像影現、如是依止如來智鏡、諸處境識衆像影現。唯以圓鏡爲譬喩者、當知圓鏡如來智、鏡平等平等。是故

智鏡名圓鏡智。
論曰。已建立斷、當建立智。依此故言、復次妙生、大圓鏡等。應知、此中以喩、顯示大圓鏡智、是能生現諸法影像平等因縁。謂諸如來第八淨識、能現能生智等影像、如大圓鏡能現世間一切影像。智相應故、假説名智。言諸處者、謂内六處。即是眼等。言諸境者、謂外六境。即是色等。此内六處外六境界、即十二處。縁此十二、生三智品心及心法。識爲主故、總名諸識。即此諸識、名衆像影。種種行相差別現故。(14)

これは「大円鏡智」に対する注釈である。すなわち、大円鏡とは諸法の影像をありのままに現出する「如来第八浄識」の譬喩であり、それは智と相応し、十二処（六根・六境）を縁として、他の三智（平等性智・成所作智・妙観察智）の諸識を生起する、という。諸識を生起するというのは、成道以前の阿頼耶識のはたらきに相当する。このことから、「如来第八浄識」は、成道以後に阿頼耶識が転換したものであることが知られる。

阿頼耶識が成道以後に浄識に転換するということは、成道以前に浄識は存在しないということである。その意味では、地論学派の南道や摂論学派の如来蔵思想に基づく心識説とは全く異なるものである。基は「第八識染浄別説、以為九也」(15)といい、九識説は第八識の染浄を別説したものにすぎないと述べている。当時流行していた摂論学派の九識説は、唯識学派の八識説によって急速に衰退することになった。

それでは、玄奘はただインド瑜伽行派の八識説を伝えたにすぎなかったのだろうか。それとも、そこに当時の中国で行われていた心識説に対する批判を込めていたのだろうか。このことに関連して、『慈恩伝』の記事を見てみたい。旅費を援助してくれた高昌王麴文泰（在位 624-640）に対し、玄奘は上啓文の中で次のように述べている。

遺教東流六百余祀、騰会、振輝於呉洛、讖什、鍾美於秦涼。不墜玄風咸匡勝業。但遠人来譯音訓不同、去聖時遥義類差舛、遂使双林一味之旨、分成当現二常、大乗不二之宗、析爲南北両道。紛紜諍論凡数百年、率士懐疑莫有匠決。…中略…然後、展謁衆師禀承正法、歸還翻譯廣布未聞、剪諸見之稠林、絶異端之穿鑿、補像化之遺闕、定玄門之指南。(16)

すなわち、仏教が中国に伝来して六百年余り、数多の僧侶が仏典を翻訳したが、言葉も違い、時間も隔たるため、一つの大乗の宗旨が「当現二常」「南北両道」に分かれてしまった。そこで、インドの諸師から正法を受け、帰国して翻訳を広め、「諸見」「異端」を断ち、遺漏を補い、仏門を導きたい、という。

ここからは、玄奘が地論学派の南北両道の解釈に疑問を持ち、正法を翻訳することで誤った解釈を無くしたいと考えていたことが窺える。それでは、玄奘が問題視した「南北両道」の「当現二常」の解釈とは、どのようなものだったのだろうか。これについて、道倫（遁倫）の『瑜伽論記』の次の記事が参考になる。

> 第九解喩門。〔遍計〕所執如虚空無體同故。依他〔起〕如怨害違損善法命故。圓成〔實〕如無盡大伏寶藏。若證得時、利益無窮故。然此寶藏喩實性者、舊来諸師取解不同。
> ①若南道諸師、引『楞伽等』云。「如來藏性具足一切恒沙功徳。本自有之、非適今也」。又即彼經云。「三十二相八十種好結伽趺坐、而爲無量煩悩＊覆隠而不顕現」。又涅槃経云。「大般涅槃本自有之。具足一切恒沙功徳」。又『華厳經』云。「佛子。一切衆生皆有佛如來藏性具諸功徳」。又『地持論』云。「性種姓者、六入殊勝展轉相續、無始法爾」。如是經論、皆證本來具諸功徳。若如北道説、無有本來一切功徳者、便同外道斷見過失。
> ②北道諸師云。立本有一切功徳、不從因生先來自有者、全同僧伽自体之過。何以得知無本有功徳者、如『楞伽經』、「大慧白佛言。若如來藏性具諸功徳者、何故世尊復説一切諸法皆悉空無生無滅。佛告大慧。我爲斷見衆生故、説本來具諸功徳」。即將此文通釋一切經意。
> ③今時泰法師云。依此論證圓成實理、成於萬徳之本、故説伏藏、不言真如具足萬徳。如護月等、雖立三乗無漏法爾種子、而是有爲体非真如。故不同南道解。然本有無漏種、故不同北道解。(17)

すなわち、円成実性の宝蔵の喩えについて、中国では種々の解釈が行われていた。①南道の地論師は、『楞伽経』や『華厳経』を引用し、一切衆生は本来功徳を具えていると主張した。一方、②北道の地論師は、同じ『楞伽経』により、本有の功徳はないと主張した。これらに対し、③唯識学派の神泰は、『瑜伽論』により、円成実の理を証すれば功徳は成就するが、それまでは宝蔵は覆われており、本来功徳を具えているとは言えないと主張した。護月は本有無漏種子を

立てるが、種子は有為法であり、真如ではないことから、南道の見解とは異なる。また、本有無漏種子は本有であるから、北道の見解とも異なる、という。

これによれば、成仏の因である出世功徳について、南道は現在にも有ると考え、北道は当来には有るが現在には無いと考えていた、ということになる。これらはいずれも常見であると言える。これが玄奘の上啓文にある「南北両道」の「当現二常」の意味であろう。

この解釈を心識説に当てはめるならば、地論学派の南道と摂論学派では、阿梨耶識を真妄和合とし、その奥に真如や阿摩羅識を立てることから、一切衆生は成道以前から成仏の因が有るという解釈になる。一方、地論学派の北道では、阿梨耶識を妄識とし、その奥に何も立てないことから、一切衆生は成道以前には成仏の因が無いという解釈になる。これらに対し、玄奘所伝の八識説は無漏種子説を加えることで、成道以前から浄識が有ることを否定するとともに、成道以前に無漏種子が有ることを認めるという学説になっている。

これは中国で行われていた二方向の心識説を調停するような学説であるが、このような学説がインドから偶然にもたらされることがあるだろうか。そこには玄奘の唯識思想が反映されていると見るのが妥当であろう。おそらく玄奘は、初期の翻訳において八識説を示し、先ず摂論学派の九識説を否定した。同時に講義において無漏種子説を示し、地論学派の南道・北道の心識説を調停した。そして、後に『成唯識論』で無漏種子説を加えた八識説を提示して、その心識説を確立したのではないかと思われる。

三、三性説

最後に、玄奘所伝の唯識思想の特徴として三性説の解釈を取りあげる。三性説は唯識思想を代表する学説であるが、文献によって差異があり、ヴァリエーションが多い。玄奘訳では、『摂大乗論釈』において三性説の解釈が複数に示され、『成唯識論』によって解釈が確立する。ここでは両者を比較することで、玄奘が支持する三性説の解釈を明らかにしたい。

玄奘訳の『摂大乗論釈』には無性釈と世親釈がある。『開元釈教録』によれば[18]、玄奘は無性釈を二年六ヵ月以上かけて翻訳し、その最後の七ヵ月に世親釈と『摂大乗論本』を並行して翻訳し、三者を同時に訳了した。『成唯識論』の翻訳はその約十年後である。

無性　『摂大乗論釈』10 巻　647 年 3 月 1 日 - 649 年 6 月 17 日
世親　『摂大乗論釈』10 巻　648 年 12 月 8 日 - 649 年 6 月 17 日
無著　『摂大乗論本』3 巻　648 年閏 12 月 26 日 - 649 年 6 月 17 日
護法等『成唯識論』10 巻　659 年閏 10 月

三性（三相）に対する世親の解釈では[19]、遍計所執相を所取であるとし、依他起相を虚妄分別を自性とする諸識であり、所取の因であるとする。無性の解釈には三つある[20]。第一釈では、遍計所執相を所取・能取であるとし、依他起相を虚妄分別に属する諸識であり、所取・能取の因縁であるとする。第二釈では、遍計所執相を所取・能取であるとし、依他起相を唯識を自性とする一切法の因縁であるとする。第三釈は三相を三性とするもので、考察から除外する[21]。これらの解釈の特徴をまとめると、次のようである。

	遍計所執性	依他起性	円成実性
世親釈	所取	虚妄分別、所取の因〔能取〕	有
無性第一釈	所取・能取	縁生、虚妄分別、所取・能取の因	真如実性
無性第二釈	所取・能取	縁生、一切法〔有為〕の因、所取・能取の因	真如実性〔無為〕

一方、『成唯識論』の三性説の解釈には三つある[22]。それらは基の『成唯識論述記』によれば、難陀等の義、安慧等の義、護法等の義であるという[23]。遍計所執性の解釈では、これを所取とみる難陀等の義に対し、所取・能取とみる安慧・護法等の義が支持されている。依他起性の解釈では、これを有漏の縁生で虚妄分別とみる安慧等の義に対し、有漏・無漏に通じる縁生とみる護法等の義が支持されている。円成実性の解釈では、これを無為法の真如とみる護法等の義のみがあげられている[24]。これらの解釈の特徴をまとめると、次のようである。

	遍計所執性	依他起性	円成実性
難陀等義	所取＝相分	〔能取＝見分〕	
安慧等義	所取＝相分 能取＝見分	縁生、虚妄分別＝自体分〔有漏〕	〔無漏〕〔無為〕
護法等義	所取≠相分 能取≠見分	縁生＝相分・見分・自体分 〔有漏・無漏〕〔有為〕	諸法実性、 二空所顕真如〔無為〕

『摂大乗論釈』と『成唯識論』の三性説の解釈を比較すると、世親釈は難陀等の義に、無性の第一釈は安慧等の義に、無性の第二釈は護法等の義に、それぞれ類似していることが分かる。すなわち、『成唯識論』の三性説の解釈に相当するものは、『摂大乗論釈』を訳了した時には既に出揃っていたということになるだろう。両者の対応関係をまとめると、次のようである。

『摂大乗論釈』　　『成唯識論』
　世親釈　　――　難陀等義
　無性第一釈　――　安慧等義
　無性第二釈　――　護法等義

これらを翻訳した玄奘の意図は、どこにあったのだろうか。玄奘は『成唯識論』において、難陀等の義よりも安慧・護法等の義に、そして安慧等の義よりも護法等の義によるべきことを明示している。おそらく、玄奘は『摂大乗論釈』を翻訳した時にも、新訳の無性釈を重視することで、旧訳の世親釈やそれに基づく摂論学派の三性説の解釈を抑制しようとしたのであろう。しかし、唯識学派では複数の解釈のどれに依るべきかが分からなくなり、かえって混乱が生じてしまった。そのため、玄奘は『成唯識論』を翻訳する時には、どの解釈によるべきかを明示することにしたのである。唯識学派の三性説の解釈はこのような経緯で確立したと考えられ、それは玄奘の唯識思想に基づいていると言えるだろう。

円測は『解深密経疏』において、三性と一切法（有為法・無為法）の関係について次のように述べている。

善男子。一切法者略有二種。所謂有爲無爲。
釋曰。…中略…然今所説有爲無爲、三釋不同。①一云。此中所説、遍計所執有爲無爲。故下經云。「決定實有有爲無爲、堅固執著隨起言説」。②一云。唯約依他所起相分有爲無爲。故下經云。「決定無實有爲無爲。然有分別所起行〔相〕」。③一云。有爲即依他起、無爲即圓成實性。④雖有三説、後説爲正。所以者何。此中意説。依他有爲。圓成無爲。二法之上、無所執性有爲無爲。故言無二也。後當分別。[25]

すなわち、有為法・無為法については三つの解釈がある。それは、①遍計所執性としての有為法・無為法、②依他起の相分としての有為法・無為法、③有為法は依他起性、無為法は円成実性、という三つであり、④三説あるが最後の説が正義である、という。円測は別の箇所で、これを玄奘の解釈であると述べ、真諦の解釈と対比している[26]。

円測が述べた三つの解釈は、先述の『摂大乗論釈』と『成唯識論』の三つの解釈と同じであると言ってよい。このように、円測の証言によって、玄奘が最後の説（無性第二釈、護法等義）を支持していたことが確認できるのである。

真諦訳に依拠する摂論学派では、分別性（遍計所執性の旧訳）と依他性（依他起性の旧訳）の否定が真実性（円成実性の旧訳）であるという三性説の解釈が主流であった[27]。これに対し、玄奘訳に依拠する唯識学派では、遍計所執性は否定されるが、依他起性と円成実性は実在するという三性説の解釈が主張された。それは『成唯識論』の三性説であるとともに、玄奘の支持する三性説だったのである。

結語

以上、五姓各別説、八識説、三性説について、玄奘の唯識思想と言えるものを、史伝・翻訳・註釈の研究を組み合わせることで指摘してきた。その特徴をまとめれば、次のようになるだろう。

五姓各別説は、『瑜伽師地論』の種姓差別説に関連して議論されるようになり、『仏地経論』において明確に定義が示された。この説は、特に無性有情の不成仏を説くことから、如来蔵思想を支持する多くの人々の反発を招いた。にもかかわらず、玄奘は『成唯識論』において無漏種子説によって五姓各別の理論的

説明を行った。ここから、玄奘が積極的に五姓各別説を支持していたことが窺える。

八識説は、玄奘訳の唯識経論に共通する心識説であるが、これは当時流行していた摂論学派の九識説を否定するものでもあった。「如来第八浄識」を説き、第九識の存在を否定したのは、ここでも『仏地経論』である。また、阿頼耶識には無漏種子説が導入されたが、これは地論学派の南北両道の心識説を調停するものでもあった。『成唯識論』では無漏種子説を加えた八識説が明文化されたが、これには玄奘の意図があったと見てよいだろう。

三性説は、『摂大乗論釈』において複数の解釈が示されたが、玄奘が支持していたのは、遍計所執性は否定されるが、依他起性と円成実性は否定されないという、無性の第二釈であったと推定される。これは、分別性と依他性の否定が真実性であるとする、摂論学派の三性説の解釈を否定するものであった。『成唯識論』では無性の第二釈に相当するものが正義として提示されているが、これは玄奘が主導したものと考えられる。

五姓各別説、八識説、三性説は、いずれも唯識学派の学説として有名なものであるが、それらは先ず『瑜伽師地論』『摂大乗論』『仏地経論』などで提起され、後に『成唯識論』において理論的に確立されたことが知られた。その過程において正義を明示してほしいという弟子たちの要望もあったであろうが、それらの学説が玄奘自身によって提起され確立されたものである以上、玄奘の唯識思想と言って差し支えないのではないかと思われる。

註

(1)『開元釈教録』巻八、T55.555b-557b。玄奘の翻訳進行状況については、吉村［2013］230-231 参照。

(2) 吉村［2013］第二篇第一章 I「玄奘の大乗観と三転法輪説」参照。

(3) 玄奘訳を梵本やチベット訳と対照することで、玄奘が強調した唯識思想を抽出することはある程度可能である。ただし、対照できる梵本は限られており、梵本やチベット訳の原典は玄奘が見たものと同じではないため、この点に注意する必要がある。

(4) 吉村［2013］では、中国唯識思想の展開を解明するために、主に摂論学派と唯識学派との教義を比較するという方法を採っている。これにより、摂論学派が唯識説を如来蔵思想によって解釈し独自の心識説・三性説・熏習説などを説いたことや、これを批判するために唯識学派が五姓各別説・理行二仏性説・無漏種子説などを主張したことが明らかとなった。

(5) 『伝教大師全集』3.154。霊潤の十四門義については、長尾［2019］参照。
(6) 吉村［2013］第二篇第三章 I 「唯識学派の五姓各別説」参照。インド瑜伽行派の種姓差別については、OKADA［2013］、岡田［2016］参照。
(7) 『仏地経論』巻二、T26.298a-b。*「性」、宋・元・宮本は「姓」に作る。
(8) チベット訳の『仏地経論』については、西尾［1940］第一巻 48 頁、第二巻 200-201 頁参照。
(9) もし玄奘が『仏地経論』の基礎としたものがチベット訳が言うように戒賢造であるとすれば、玄奘は師説に手を加えてまで五姓各別説を訳出したかったことになる。しかし、玄奘訳は親光等造とされているので、この問題についてはさらなる考察が必要である。
(10)『成唯識論』巻二、T31.9a。なお、不定種姓は初めは廻心向大して成仏する者とされていたが、後には菩薩と声聞の無漏種子をもつ者（菩薩声聞二性不定）、菩薩と独覚の無漏種子をもつ者（菩薩独覚二性不定）、声聞と独覚の無漏種子をもつ者（声聞独覚二性不定）、菩薩と独覚と声聞の無漏種子をもつ者（菩薩独覚声聞不定）の四種類に分けられ、一部は成仏できないとされた。
(11) 吉村［2013］第 1 篇第 3 章「摂論学派の心識説」121 頁参照。同書に「地論北道　八識説」とあるのを、「地論北道　七識説」に訂正した。
(12) 地論学派の心識説については、吉村［2013］第 1 篇第 2 章「摂論学派の心識説」参照。
(13) 摂論学派の心識説については、吉村［2013］第 1 篇第 3 章「摂論学派の心識説」、第 5 章「摂論学派の九識説」参照。
(14)『仏地経論』巻四、T26.309a-b。
(15)『瑜伽論記』巻一上、T42.318a。
(16)『慈恩伝』巻一、T50.225c-226a。
(17)『瑜伽論記』巻二十上、T42.764a-b。*「煩悩」、大正蔵は「無」に作る。『韓仏全』14.514c の校訂に従い「煩悩」に改める。
(18)『開元釈教録』巻八、T55.556b-c。
(19)『摂大乗論釈』巻四、T31.388a-b。
(20)『摂大乗論釈』巻四、T31.399a-c。
(21)『摂大乗論釈』の三性説については、吉村［2017］参照。
(22)『成唯識論』巻八、T31.45c-46c。
(23)『成唯識論述記』巻九本、T43.540a 以下。
(24)『成唯識論』の三性説については、吉村［2016］参照。
(25)『解深密経疏』巻二、続蔵 1-34.324c-325a。
(26)『解深密経疏』巻二、続蔵 1-34.330c-d, 325a-d。円測の三性説については、吉村［2014］［2020］参照。
(27) 摂論学派の三性説については、吉村［2013］第 1 篇第 4 章「摂論学派の三性説」参照。

参考文献

OKADA Eisaku / 岡田英作

［2013］“*Agotrastha* in the *Bodhisattvabhūmi*: The *Paripākapaṭala* and the *Bodhisattvaguṇapaṭala*”, JOURNAL OF INDIAN AND BUDDHIST STUDIES 61-3

［2016］「瑜伽行派における五種姓説の成立―瑜伽行派の注釈文献を中心として―」『密教文化』236

長尾光恵

［2019］「霊潤「一巻章」所説の十四門義について―第十門における四諦義を中心に―」『印度学仏教学研究』67-2

西尾京雄

［1940］『仏地経論之研究』（後に国書刊行会、1982 年再刊）

吉村　誠

［2013］『中国唯識思想史研究―玄奘と唯識学派―』大蔵出版

［2010］「唯識学派における「如来蔵」の解釈について」『印度学仏教学研究』59-1

［2014］「中国唯識における円測の位相―三性説を中心に―」『駒澤大学仏教学部論集』45

［2016］「『成唯識論』の三性説について」『駒澤大学仏教学部論集』47

［2017］「中国唯識学派における三性説について―玄奘訳『摂大乗論釈』を中心に―」『印度学仏教学研究』65-2

［2020］「中国唯識学派おける三性説の受容について――『解深密経』勝義諦相品に対する円測の解釈を中心に――」『印度学仏教学研究』68-2（掲載予定）

［追記］本稿は 2019 年 10 月 19 日に韓国・中央僧伽大学校で開催された第 12 回中央僧伽大学校大学院学術大会における発表原稿に修正を加えたものである。